

## 道真の同僚

滝川 幸 司

### 要 旨

菅原道真の官歴を辿りながら、その時々々の同僚を考証した。道真の公生活における交流を知るためであり、今後の道真伝研究への一階梯となすためである。

### はじめに

菅原道真の伝記として定評があるのは、坂本太郎の人物叢書本である。その他にもいくつか公刊されているが、しかし、多くは叢書の一冊であって、詳細な伝記とはいいがたい面があるし、取りあげられていない資料も多い。道真には、『菅家文章』『菅家後集』という別集も残り、当時の詩人としては他を圧して資料に恵まれているにも拘わらず、本格的な道真伝は、いまだ書かれていないといっている。う。

本稿は、道真の同僚を考証する。これも道真伝の一環として、道真の交流を探るための作業である。

道真の交流であれば、『菅家文章』『菅家後集』に見られる人物を手掛かりとするのが常道であろう。しかし、既にいくつかの先行研究も見られるので、<sup>①</sup>今ままであまり考慮されなかった同僚に注目する。同僚という関係は、道真の公生活における交流を探るためには必要なものである。もともと、一時期同僚だからといって、どれ程の交流があったのか疑問もあろう。しかし、官司の一体性・共同性を考慮することもある必要であろう。吉川真司は、政務と食事の関係を論じて「緊張した政務の後に、ややうちとけた雰囲気で行なわれる。食事の際には軽い言談も許されていたといい、こうした中で官司の共同性、人的一体性が保たれていたと考えられる」と指摘し、さらにこれは、「太政官以外の諸司でも基本的には同様であろう」と推測する。<sup>②</sup>また、「公卿着座」に触れて、

公卿が着くのは太政官庁・外記庁の座であるが、……弁・史は結政所の座に着くのであるが、式部官人の場合は式部省の曹司の座であろうが、いずれにせよ、日時の吉凶や先例が問題にされ、着座後しばらくは身を慎まねばならないなど、この儀はきわめて重視されていた。それは最初が肝心といった単純な理由からだけで

はなく、官司の一員となる（または官司での地位が変わる）ということに大きな意味があったからであろう。官司の下級官に饗・禄がふるまわれるのも、同じ理由にもとづくものと言える。日本古代の官司は我々の想像以上に人間の集団という性格が強く、そこでの位置を認められる手続きこそ着座と饗禄だったのかも知れない。<sup>3)</sup>と述べる。

吉川がいうように、諸司においても、共同性・人的一体性が保たれる儀式が行われたとすれば、同僚の存在は、やはり公的生活における道真の交流の中でも重要な位置を占めるといえよう。

以下、道真の官歴をたどりつつ、同僚を考証していく。参議以上の議政官となった場合には『公卿補任』が存するので把握しやすいが、その他の官職の場合は、いくつかの補任の刊行を見るものの、たやすく一覧することは難しい。従って本稿では、議政官については『公卿補任』に基づき、それ以外についてはやや詳しく考証を行った。また、稿末には、索引も兼ねて、同僚一覧を付した。

道真の官歴については、基本的に正史・『公卿補任』・『政事要略』（卷二十二・年中行事八月上・北野天神会）所引道真伝、『北野天神御伝』に基づく。疑義がある場合にのみ出典を記すが、それ以外は煩雑なので省略する。なお、就任年・離任年については、資料に明記されるものについては「任」「及第」「去」等と記した。「見」は、その官職で資料に見える場合である。離任日の多くは明確ではないが、次

の官職に就任した日付、あるいは後任者の就任日によって記した。離任年月に「去」等を記さないのがその例である。なお、同僚であるか否か判断できない場合は、「？」を付した。

引用資料については、『続日本後紀』↓『続紀』、『日本文徳天皇実録』↓『文徳』、『日本三代実録』↓『三代』、『日本紀略』↓『紀略』などと適宜略記した。『公卿補任』を始めとした補任は、『公卿』などと「補任」を省略して示した。

### 同僚考証

○文章生（貞観4・5・17及第同9）

〔同僚〕

#### 文章博士

菅原是善（承和12・3・5任）貞観9・2・11）

巨勢文雄（貞観9・2・11任）元慶1・4・26以前）

橋広相（貞観9・2・11任）同11・2・1）

#### 文章生

橋広相（貞観2・4・26及第）同6・8・8対策及第）

都良香（貞観2・4・26及第）同10以前得業生）

高階令範（貞観2・4・26及第）同11・1・7以前）

藤原淵名（貞観2・4・26及第）

味酒文宗（貞観3見）元慶4・1・11以前）

有名王？（貞観4以前）元慶8・2・23以前）

坂上斯文？（貞観4以前）同4・7・28以前）

〔考証〕

文章博士 菅原是善は、承和十二年三月五日に任文章博士（『統紀』）。貞観九年二月十一日に巨勢文雄と橘広相が文章博士に任じられており（『三代』）、是善はここで離任したと思われる。なお、広相は道真と同じ文章生として過ごした後、博士として道真の前に現れることになる。巨勢文雄は、元慶元年四月二十六日には「従五位上守左少弁巨勢朝臣文雄」（『三代』）として見える。同年四月一日には文章博士として見え、同年十月十八日には道真が文章博士に任じられるので、四月二十六日以前には博士を離れていたか。文雄と同日に文章博士に任じられた博覧（広相）は、貞観十一年二月一日に東宮学士に任じられ（『三代』）、文章博士を離れた。貞観十七年二月二十七日に都良香が文章博士に任じられるまで（同前）、文雄は一人の文章博士であったと考えられる。

文章生 文章生については、古藤真平に詳しい<sup>4)</sup>。古藤論を参照しつつ述べる。大江匡衡「請重蒙天裁弁定大内記紀齊名称有病累瑕瑾所難学生大江時棟奉試詩状」（『本朝文粹』巻七・178）は、「聴古楽」（題者大江音人）の題で試を奉じ及第したものとして、都良香、高階令範、藤原淵名の三人を上げる。この内、良香については、『古今和歌集目録』によって、貞観二年四月二十六日及第と判明する。従って、他の二人も同日及第であろう。また、橘広相は、『公卿』元慶八年によれば、「貞観二四―文章生（字朝綾）」とあって、これも同日の及第と認められる。文章生を終えた時期は何れも不明確である。橘広相は、前掲

『公卿』に「（貞観六）八月八对策及第」と見え、これ以前に文章得業生となつている。都良香は、某年五月十六日に安芸権少目、貞観十年正月十六日に播磨権大目（『古今和歌集目録』）で、これらは文章得業生の兼国であろうから、これ以前に文章得業生となつていたと推測される。恐らくは貞観七、八年頃に得業生となつたか<sup>5)</sup>。令範は、貞観十一年正月七日に「式部大丞高階真人令範」（『三代』）と見え、これ以前には文章生を終えていたと考えられる。淵名についてはこれ以外に資料が管見に入らない。味酒文宗は、貞観三年九月二十六日に文章生として見え（同前）、元慶四年正月十一日に少外記に任じられている（『外記』）。これ以前に文章生から離れたのであろう。有名王、坂上斯文は、前掲大江匡衡奏状によって「連理樹」の題で試を奉じ及第している。但し及第の年次は未詳。有名王は、元慶八年二月二十三日に「散位正六位上有名王、……並びに従五位下」（『三代』）と見えるのが正史に現れる最初。これ以前に文章生から離れた。斯文は、貞観四年七月二十八日に「左京人前越後介外従五位下坂上伊美吉能文・大少允従六位上坂上伊美吉斯文等九人、姓坂上宿祿を賜ふ」（同前）と見えるのが初見。これ以前に文章生から離れた。有名は斯文と同時の及第であるから、これ以前に文章生であったことになる。但し、貞観四年時点で有名も文章生であったか否かは厳密には未詳。

○文章得業生（貞観9転く貞観12・3・23对策、5・17及第）

道真は、貞観九年に文章得業生に転ず。なお『公卿』によれば、

〔貞観九年〕二月廿九下野権掾に任ず（文章得業生）とあって、二月二十九日には既に得業生であったようである。但し、『政事要略』所引道真伝では、貞観八年五月七日とする。道真の対策は貞観十二年三月二十三日、及第は五月十七日、問者は都良香（『菅家文章』巻八・省試対策文二条判注）。

〔同僚〕

文章博士 巨勢文雄（貞観9・2・11任）元慶1・4・26以前）

橘広相（貞観9・2・11任）同11・2・1）

文章得業生 安倍興行？（貞観7・1以前）貞観11・1・7以前）

都良香（貞観10以前）貞観11・6・19対策及第）

藤原佐世？（貞観14・5・23見）

〔考証〕

文章博士 道真得業生時代の文章博士は、文章生時代から引き続き、巨勢文雄、橘広相であり、前項で述べたように、貞観十一年二月一日に広相が東宮学士に任じられて以後は文雄のみが文章博士であった。文章得業生 道真が得業生になる前後の文章得業生を調査すると、古藤一覽によれば、貞観五年七月二十二日以前に御船助道が得業生となっている（『二中歴』第十二）。助道は、貞観五年八月九日に「散位従七位上船連助道等男女六人。姓菅野朝臣を賜ふ」（『三代』）として見え、また、貞観六年正月十六日に任少外記（尊経閣文庫本『外記補任』）。従って、道真と同時期の得業生ではない。大中臣国雄は、貞観八年正月七日に「文章得業生大中臣朝国雄」（『三代』）と既に文章得業生と

して見える。国雄は、貞観八年七月十四日には「散位従五位下大中臣朝臣国雄」（同前）とあるので、これ以前に得業生から離れており、道真と同時期ではない。安倍興行は、父安仁の薨伝に「興行始めて秀才に挙げられ、対策及第」（『三代』貞観元年四月二十三日条）と秀才＝文章得業生であり対策及第したことが見える。興行は貞観十一年正月七日には、既に大内記として見えるから（『三代』）、これ以前に対策及第していると考えられる。道真に「会安秀才饒舎見防州（探得闕字）」（『菅家文章』巻一・18）の作がある。この安氏は安倍氏と推測されるが、先に触れた安仁薨伝に「子男八人有り。貞行・宗行・清行・興行」とある、貞行・宗行・清行の何れかであろう。貞観七年正月二十七日に、勘解由次官であった宗行は周防守に任じられている（『三代』）。また、清行も貞観十三年正月二十九日に周防守に任じられている（『古今和歌集目録』）。「安秀才」とある以上文章得業生であり、安仁薨伝では興行が初めて秀才となったというのだから、ここは興行であろう。とすれば、興行は貞観十一年正月七日に大内記であったわけだから、ここに見える舎兄は貞観七年に周防守に任じられた宗行ということになる。そして、貞観七年正月時点で興行は文章得業生であったことになる。文章得業生の定員は二名だから、恐らく先の国雄とともに得業生であったと推測される。興行がいつ対策及第したかは明らかにし得ないが、前項で述べたように、貞観十年以前に都良香が得業生、良香の対策及第が貞観十一年六月十九日であること、また、道真自身の転得業生が貞観九年であることも勘案すれば、得業生の定員は

二名なのだから、少なくとも貞観十年～貞観十一年六月十九日の間は、良香と道真が得業生である。興行の対策及第後、良香あるいは道真が文章得業生となったのであろう。道真の転得業生が『政事要略』所引道真伝のごとく、貞観八年五月七日であるとすれば、道真は興行と同時に得業生であった可能性もある（その場合、良香は興行及第後に得業生に転じたことになる）。貞観十四年五月二十三日に、文章得業生藤原佐世が見えている（『三代』）。道真の後とも良香の後ともいづれとも考えられるが、良香の後とすれば道真と同時期の得業生となる。

○下野権少掾（貞観9・2・29任～同12・5?）

得業生の兼国であろうから、対策及第する貞観十二年五月までか。但し、この時期の下野守・介等は未詳。

○玄蕃助（貞観13・2・29任～同13・3・2）

貞観十三年正月二十九日に文章得業生の旁にて玄蕃助に任じられる（『公卿』）。但し、『政事要略』所引道真伝、『北野天神御伝』では、二月とあって齟齬する。『日本三代実録』によれば、二月二十九日に除目が行われているので、後者に従うべきであろう。同年三月二日に少内記に任じられるまでのわずかな期間となるか。

〔同僚〕

玄蕃頭 弘道王（貞観12・2・14任～同16・8・13見）

〔考証〕

弘道王が、貞観十二年二月十四日に任じられている（『三代』）。弘道は、貞観十六年八月十三日にも玄蕃頭として見える（同前）。なお、他の同僚は未詳。

○少内記（貞観13・3・2任～同16・1・15）

〔同僚〕

大内記 安倍興行?（貞観11・1・7見～同13・10・5以前）

大江公幹（貞観14・5・25見）

都良香（貞観15・1・13任～同17・2・27見）

少内記 都良香（貞観12・2・21任～同15・1・13以前）

惟良高尚?（貞観17・4・28見）

〔考証〕

大内記 貞観十一年正月七日に安倍興行が見える（『三代』）。興行は、同十二年十二月十七日にも大内記として見える（同前）。貞観十三年十月五日には既に勘解由次官であり（同前）、これ以前に大内記から離れていた。興行に続いて見える大内記は、貞観十四年五月二十五日に「従六位下守大内記大江朝臣公幹を鴻臚館に遣はして、勅書を賜ふ」（同前）と、大江公幹である。恐らく、興行の後任が公幹であったのだろうが、交替時期は定かにしがたい。あるいは興行は道真の任少内記時には離れていた可能性もある。その後、都良香が貞観十五年正月十三日に「従五位下行少内記都宿祢良香を以て大内記と為す」（同前）と、少内記から昇進している。良香は、貞観十七年二月二十七日にも

大内記として見え(同前)、少内記時代の道真の最後の上司であったことが確認できる。

少内記 『古今和歌集目録』によれば、都良香が、貞観十二年二月二十一日に任少内記である。良香の次に見える少内記は、貞観十七年四月二十八日に「少内記正七位下惟良宿祢高尚を都講と為す」(『三代』)と見える惟良高尚である。高尚が資料に見えるのもこれが最初で、良香の後任か道真の後任かは未詳。良香の後任であれば、一時期道真の同僚であった可能性がある。

○存問渤海客(貞観14・1・6任)同14・1・26去)

貞観十四年正月六日、存問渤海客使を兼ねるが、同正月二十六日、母の憂によって離れる。

〔同僚〕

存問渤海客 美奴清名(貞観14・1・6任)

通事 春日宅成(貞観14・1・6任)

〔考証〕

『三代』貞観十四年正月六日条に「正六位上行少内記菅原朝臣道真・従六位下行直講美奴連清名を以て存問渤海客使と為す。園池正正六位上春日朝臣宅成を通事と為す」と見える。

○兵部少輔(貞観16・1・15任)同16・2・29)

〔同僚〕

兵部卿 本康親王(貞観5・2・7任)元慶8・3・9)

兵部大輔 藤原諸葛(貞観13・3・11任)同17・9見)

〔考証〕

兵部卿 本康親王は、貞観五年二月七日に「四品彈正尹本康親王を兵部卿と為す」(『三代』)と兵部卿に任じられ、貞観十六年八月二十一日段階でも兵部卿として見える(同前)。元慶八年三月九日に「二品行兵部卿本康親王を式部卿と為す。…四品守彈正尹兼行上野太守惟恒親王を兵部卿と為す。上野太守故の如し」(同前)とあって、この時まで本康は兵部卿であった。

兵部大輔 『公卿』元慶三年によれば、藤原諸葛が貞観十三年三月十一日に任兵部大輔である。また『職事』によれば、大輔のまま、貞観十七年九月に藏人頭に補されており、道真が少輔に任じられた時点では、諸葛が大輔であったことになる。

なお、少輔としては、貞観十四年五月二十四日条に高階令範が見え、元慶二年八月二十日に平季長が見える(『三代』)。令範については、これ以後正史に記録が見えない。季長は、貞観十四年四月十六日に「正六位上行式部少丞平朝臣季長」(同前)と式部少丞であることが見える。恐らく、令範の後任として道真が任じられ、その後、季長に替わったと考えられる。

○民部少輔(貞観16・2・29任)同19・1・15)

〔同僚〕

## 民部卿

南淵年名（貞観9・1・12任）同16・3辞）

藤原冬緒（貞観16・3任）元慶8・3・9）

## 民部大輔

潔世王（貞観17・7・3見）

藤原保則（貞観18・2・15任）同19・1・15）

## 民部大丞

藤原貞則（貞観19・1・3見）

藤原佐世？（元慶1・11・21見）

## 〔考証〕

**民部卿** 南淵年名は貞観九年正月十二日に民部卿に任じられ（『三代』）、貞観十六年三月に民部卿を辞す（『公卿』貞観十六年）。後任は藤原冬緒で、同月に任じられている（『公卿』貞観十六年）。冬緒は元慶八年三月九日に彈正尹を兼ね、民部卿を在原行平に譲るまでその任にあつた（『三代』、『公卿』元慶八年）。年名、冬緒が道真の上司であつたことになる。

**民部大輔** 潔世王が貞観十七年七月三日に見える（『三代』）。潔世王は、貞観十一年三月四日には大学頭として見える（同前）。民部大輔就任時期は不明であるが、貞観十三年十月五日条には「大学頭従五位上兼行文章博士巨勢朝臣文雄」（同前）と巨勢文雄が大学頭として見えるので、これ以前に大学頭から民部大輔に交替していたか。従つて、潔世王がまずは道真の少輔時代の大輔と考えられる。続いて、藤原保則が貞観十八年二月十五日に民部大輔に任じられている（『公卿』寛平四年）。潔世王の後任であろう。保則は、貞観十九年正月十五日に右中弁に任じられており（同前）、この時、大輔から離れたか。

**民部大丞** 道真の少輔時代近辺で見えるのは、元慶元年（貞観十九年）

正月三日の「民部大丞藤原朝臣貞則」（『三代』）、同年十一月二十一日の「民部少丞藤原朝臣佐世」（同前）だが、佐世がこれ以前いつから少丞であつたかは未詳。貞則は道真の部下であつたが、佐世に関しては不明である。

## ○式部少輔（貞観19（元慶1）・1・15任）仁和2・1・16）

## 〔同僚〕

## 式部卿

時康親王（貞観18・12・26任）元慶8・2・4踐祚）

本康親王（元慶8・3・9任）延喜1・12・14薨）

## 式部大輔

橘広相（貞観19・1・15任）元慶5・2・15）

藤原春景（元慶5・4・9見）仁和1・5・1見）

## 式部大丞

藤原保蔭？（貞観19・1・3見）

小野葛絃（元慶1・11・21見）同2・1・11）

平定相（元慶1・11・21見）

藤原邦直（元慶3・1・7見）

藤原貞幹（元慶3・11・25見）

藤原繼蔭（元慶5・2・14見）

文室長省（元慶5・2・14見）

上毛野氏永（元慶6・1・7見）

藤原当興（元慶7・1・7見）

八多常永（元慶8・2・23見）同8・3・9）

坂上茂樹（元慶8・6・23見）

高階茂範（元慶8・11・25見）仁和1・1・16）

藤原興範（仁和1・1・16任）同3・2・2）

大江玉淵（仁和2・1・7見）同2・1・16）

#### 式部少丞

高階茂範（元慶7・1・1見）同8・11・25以前）

藤原興範（元慶7・1・11任）仁和1・1・16）

藤原連永（仁和1・閏3・19見）

#### 式部大録

大和酒人宗雄（元慶1・12・25見）同3・1・7見）

大和宮雄（元慶2・2・29見）

山口岑世（元慶7・1・7見）

香山弘行？（仁和2・8・14見）

#### 式部少録

時原利行（仁和1・12・10見）同3・2・10見）

善淵邦彦（仁和1・12・10見）同2・5・27見）

#### 〔考証〕

式部省の補任については、笠井純二「式部省補任稿―仁和三年前―」<sup>7)</sup>、小野泰央「式部省関連資料（一）」<sup>8)</sup>がある。これらに導かれつつ述べる。

**式部卿** 時康親王（光孝天皇）は、貞観十八年十二月二十六日に式部卿に任じられ（『三代』）、元慶八年二月四日に踐祚するまで式部卿であったと思われる。時康の即位に伴い、式部卿は、本康に遷る。本康は、元慶八年三月九日に式部卿（同前）。以後、道真の讃岐赴任まで、本康が式部卿である。

**式部大輔** 道真が少輔に任じられる正月十五日に、父是善が式部大輔

から刑部卿に遷っている（『三代』元慶四年八月三十日、『公卿』元慶元年）。是善の後任として橘広相が正月十五日に任ぜられる（『公卿』

元慶八年）。すなわち道真と同時の任である。広相は、元慶五年二月

十五日に右大弁に任じられているが、その時に大輔から離れたと思し

い（同前）。広相の後任は、藤原春景であろう。『三代』元慶五年四月

九日条に「式部大輔藤原朝臣春景」として見える。また、仁和元年五

月一日条にも大輔として見える（同前）。

**式部大丞** 藤原保蔭が貞観十九年（元慶元年）正月三日に「式部大丞

藤原朝臣保蔭」（『三代』）と見えるが、保蔭が正史で見えるのはこれ

のみ。道真就任まで大丞のままであったかどうかは不明である。小野葛

絃は、元慶元年十一月二十一日に式部大丞として見える（同前）。元

慶二年正月十一日に加賀介に遷っており（同前）、この時に大丞は離

れたと思われる。平定相は、元慶元年十一月二十一日に式部大丞とし

て見えるが（同前）、翌年正月十一日に「從五位下平朝臣定相を越中

介と為す」（同前）とあって、既に式部大丞を離れていたらしい。藤

原邦直は、元慶三年正月七日に式部大丞として見えるが（同前）、仁

和三年五月十三日には「散位從五位下藤原朝臣邦直を刑部大輔と為す」

（同前）と、既に式部大丞を離れているようである。藤原貞幹は、元

慶三年十一月二十五日に式部大丞として見える（『三代』）。元慶八年

十一月二十五日に「散位藤原朝臣貞幹等、並びに從五位上」（同前）

と散位として登場し、それ以前には大丞を離れているようである。藤

原繼蔭は、元慶五年二月十四日に式部大丞として見える〔三代〕。仁和二年正月七日に「散位藤原朝臣繼蔭並びに従五位上」(同前)とあるので、これ以前に大丞を離れていたと思われる。文室長省は、元慶五年二月十四日に式部大丞として見えるが〔三代〕、これ以後の任官は明らかではない。上毛野氏永は、元慶六年正月七日に式部大丞〔三代〕として見える。元慶八年六月二十三日に「式部大丞正六位上坂上大宿祢茂樹・勘解由主典従七位下凡直康躬等を石見国に遣し、訴訟の事を推せしむ。彼の国司に下知して稱く、介外従五位下忍海山下連氏則等、去月六月六日解に稱く、管摩郡大領外従八位上伊福部直安道、部内百姓を率ゐ、来りて權守従五位下上毛野朝臣氏永を困む。政法に乖るが為なり。仍りて印匙を奪取す」(同前)という記事があり、政が法に悖るといふ理由で、伊福部安道等に印匙を奪われている。これ以前に石見權守で、式部大丞から離れたらしい。藤原当興は、元慶七年正月七日に式部大丞として見える〔三代〕。元慶八年三月九日に「兵部少輔従五位下藤原朝臣当興を甲斐守と為す」(同前)と既に兵部少輔であるので、これ以前に大丞からは離れていたのであらう。八多常永は元慶八年二月二十三日に式部大丞として見える〔三代〕。元慶八年三月九日に「従五位下行式部大丞八多朝臣常永を美作守と為す」(同前)と見えるので、ここで式部大丞を離れた。坂上茂樹は元慶八年六月二十三日に式部大丞として見える〔三代〕。高階茂範は、元慶八年十一月二十五日に式部大丞として見える(同前)。仁和元年正月十六日に「従五位下行式部大丞高階真人茂範を下野守と為す」(同前)と下野守に任じられているので、ここで大丞を離れたのであらう。藤原興範は仁和元年正月十六日任式部大丞〔公卿〕延喜十一年)。仁和三年二月二日に「従五位下行式部大丞藤原朝臣興範を掃部頭と為す」〔三代〕と掃部頭に任じられている。ここで式部大丞を離れた。大江玉淵は、仁和二年正月七日に式部大丞として見える〔三代〕。仁和二年正月十六日に「従五位下行式部大丞大江朝臣玉淵を日向守と為す」(同前)と日向守に任じられているので、ここで式部大丞を離れた。

**式部少丞** 高階茂範は、元慶七年正月一日、同三月八日に式部少丞として見える〔三代〕。先述したように、元慶八年十一月二十五日には式部大丞なので、これ以前に少丞から大丞に転じたのであらう。藤原興範は、元慶七年正月十一日任式部少丞、仁和元年正月十六日転式部大丞〔公卿〕延喜十一年)。藤原連永は、仁和元年閏三月十九日に式部少丞として見える〔三代〕。翌二十日に「従五位下藤原朝臣連永を大宰少丞と為す」(同前)とあつて、これ以前に少丞は離れていなかった。

**式部大録** 大和酒人宗雄は、元慶元年十二月二十五日、同三年正月七日に式部大録として見える〔三代〕。大和宮雄は、元慶二年二月十九日に式部大録として見える〔類従符宣抄〕卷九)。山口岑世は、元慶七年正月七日に式部大録として見える〔三代〕。仁和三年二月二日には「散位外従五位下山口朝臣岑世を伊豆守と為す」(同前)とあるので、これ以前に大録から離れていたのであらう。香山弘行は、仁

和二年八月十四日に式部大録として見えるが(『三代』)、道真は同年正月に式部少輔から離れているので、同僚であったかは未詳。

式部少録 時原利行は仁和元年十二月十日に式部少録として見える

(『類聚符宣抄』巻十)。仁和三年二月十日にも少録である(同前巻九)。

普洲邦彦は、仁和元年十二月十日に式部少録として見える(『類聚符宣抄』巻十)。仁和二年五月二十七日にも少録であったことが確認できる(同前巻九)。

○大嘗会御前次第司次官(元慶1・9・26任)

大嘗祭が十一月十八日なので、それまでの任と思われる。

〔同僚〕

御前次第司長官 大江音人(元慶1・9・26任)

〔考証〕

元慶元年九月二十六日に「大嘗会御禊装束及び前後次第司を任ず。参議大宰権帥従三位在原朝臣行平を以て装束司長官と為し、従五位上守右少弁兼行中宮亮藤原朝臣遠経を次官と為す。判官二人、主典二人。参議従三位行左衛門督大江朝臣音人を御前次第司長官と為し、式部少輔従五位下菅原朝臣道真を次官と為す。判官二人。主典二人。参議従三位行右衛門督源朝臣勤を御後次第司長官と為し、中務少輔従五位下大江朝臣公幹を次官と為す。判官二人。主典二人(『三代』)と任官記事がある。

○文章博士(元慶1・10・18任、仁和2・1・16)

〔同僚〕

都良香(貞観17・2・27任、元慶3・2・25卒)

橘広相(元慶8・5・26任、寛平1以前?)

〔考証〕

都良香は、貞観十七年二月二十七日に文章博士に任じられて以後、元慶三年二月二十五日に卒するまで博士であった(『三代』)。広相は、元慶八年五月二十六日に「右大弁従四位上兼行勘解由長官橘広相を文章博士と為す(『三代』)と文章博士に任じられる。広相が博士であるのは、仁和三年八月二十二日に「参議左大弁従四位上兼行勘解由長官文章博士臣橘朝臣広相等、上表して皇太子を立てんことを請ひて曰く、…」(同前)と見えるのが正史での最後である。『公卿』仁和四年によれば、「参議」橘広相(五十二)〈左大弁。文章博士。二月十日兼近江守侍従。十一月廿五日正四上〉と見え、阿衡紛議が終局を迎えつつあった仁和四年十月二十七日に「勅して博士広相朝臣を召さしむ(『政事要略』所引『寛平御記』)と見えるのが、文章博士としては最後のようで、『公卿』によれば、仁和五年(寛平元年)には文章博士を離れていたようである。

なお、道真は、良香の卒後、元慶八年五月二十六日に広相が博士になるまで、一人の文章博士であった。「請被補文章博士一員闕共済雑務状」(『菅家文章』巻九・597)によって、道真は、文章博士の欠員を補うことを請うているが、この奏状の日付は「元慶八年二月廿五日」

である。その後、広相が任じられたということになる。

○齋宮行禊前次第司長官（元慶2・8・20任）

『三代』同日条に、「伊勢齋内親王行禊前後次第司を任ず。式部少輔兼文章博士従五位下菅原朝臣道真を前次第司長官と為す。判官主典各一人。兵部少輔従五位下兼行伊勢権介平朝臣季長を後次第司長官と為す。判官主典各一人」と見える。これで明らかのように、部下である判官・主典は不明。この時の齋宮は、清和皇女識子内親王。元慶元年二月十七日に「伊勢賀茂齋内親王を卜定す。伊勢齋識子内親王、賀茂齋敦子内親王並びに卜食」と齋宮に卜定。元慶二年八月二十六日に「伊勢齋内親王、明日を以て野宮に入らんとす。仍りて建礼門前に於て、大祓を修す」と野宮に入るために建礼門前で大祓を行い、元慶二年八月二十八日に「伊勢齋内親王、雅楽寮仮宮自ら出でて、鴨河に禊し、即ち野宮に入る」とある。

○齋宮行禊前次第司長官（元慶3・8・19任）

『三代』同日条に「伊勢齋内親王行禊前後次第司を任ず。従五位上行式部少輔兼文章博士菅原朝臣道真を以て前次第司長官と為す。判官一人。主典一人」と見える。判官・主典各一人は不明。この年、九月九日に「伊勢齋内親王齋宮に入る。是の日。早朝、葛野河に臨みて、以て禊事を修す。即便ち豊楽院に参入す。天皇豊楽

殿に御し、内親王を發たしむ。天皇中臣を喚ぶ。神祇大副大中臣朝臣有本称唯して、昇殿して跪きて侍る。右大臣天皇に代はりて、勅して曰く。有本称唯す。殿を降りて退出。是の時、天子幼少にして、右大臣摂政たり。故に此の事を行ふ。齋内親王輿に駕し、朱雀門掖門より出でて、東に向ひ路に就き、輿に乗りて宮に還る」

（『三代』）とある。

○加賀権守を兼ねる（元慶7・1・11任〜仁和2・1・16）

〔同僚〕

加賀介 島田良臣？（元慶5・2・15任〜元慶6見）

加賀権介 源矜（元慶8・5・26見）

〔考証〕

宮崎康充編『国司補任』<sup>9)</sup>によりつつ記す。

加賀介 島田良臣が元慶五年二月十五日に加賀介に任じられている（『外記』）。道真就任時も介か。良臣は元慶六年にも加賀介として見える（同前）。但し、八月二十五日の日本紀竟宴に参加していた（『三代』）。良臣は元慶二年の講書以来都講）のが記録に見える最後。間もなくして卒したとすれば、同僚ではないことになる。

加賀権介 元慶八年五月二十六日に源矜が権介として見える（『三代』）。

○治部大輔（仮）（元慶7・4・21任〜同7・5・12?）

〔同僚〕（渤海客接待要員）

玄蕃頭(仮) 島田忠臣(元慶7・4・21任)同7・5・12?)

掌渤海客使 紀長谷雄(元慶7・4・2任)同7・5・12?)

坂上茂樹(元慶7・4・2任)同7・5・12?)

〔考証〕

『三代』元慶七年四月二十一日条に「渤海客を饗するに縁りて、諸司官人雑色人等、客徒在京の間、禁物を帯ぶるを聴す。従五位上行式部少輔兼文章博士加賀權守菅原朝臣道真を以て、權に治部大輔の事を行はしむ。従五位上行美濃介嶋田朝臣忠臣、權に玄蕃頭を行はしむ。渤海大使裴翹に対せんが為なり。故に之れを為す」とある。渤海使への接待としては、上記のごとく島田忠臣が仮に玄蕃頭となっている。また、同年四月二日には、紀長谷雄と坂上茂樹が掌渤海客使に任じられている(同前)。なお、同年五月十二日に渤海客は帰途に就いているのでそれまでの官か。

○大嘗会前次第司次官(元慶8・10・2任)

〔同僚〕

前次第司長官 在原行平(元慶8・10・2任)

〔考証〕

『三代』元慶八年十月二日条に「大嘗会御袂装束并前後次第司を任ず。

…正三位行中納言兼民部卿在原朝臣行平を前次第司長官と為す。従五位上行式部少輔兼文章博士加賀權守菅原朝臣道真を次官と為す。判官主典各一人。…とある。なお、大嘗会は十一月二十二日。

○讚岐守(仁和2・1・16任)寛平2春)

仁和二年正月十六日、任讚岐守。寛平二年春に任期を終えて帰洛するまで守であったはずだが、後任の守が見えず、離任時期は定かではない。但し、『日本紀略』寛平二年正月二十八日に除目がある。後述する在原友子はこの日に讚岐權介に任じられている。あるいは道真後任の讚岐守も同日に任じられたか。

〔同僚〕

讚岐權守 平正範(仁和2・1・16任)同3・6・25見)

藤原時平(仁和5・1・16任)同3・3・19見)

讚岐介 藤原高藤(元慶8・3・9任)仁和3・6・25見)

源湛(仁和5・1・16任)同4・5・23以前)

讚岐權介 高階忠岑(仁和2・2・21任)

在原友子?(寛平2・1・28任)

讚岐掾 藤司馬

讚岐權掾 中原月雄(仁和2・6・19任)同4・4・28見)

讚岐權大掾 藤原清貫(仁和4・2・10任)寛平5・5・16)

讚岐目 倉主簿

〔考証〕

前掲『国司補任』によりつつ述べる。

讚岐權守 平正範が、道真と同日に任(『三代』)。仁和三年六月二十五日にも權守として見えるが(同前)、仁和二年二月二十一日に「從

四位下行讃岐権守平朝臣正範を木工頭と為す。本官故の如し」(同前)と木工頭を兼任し、さらに同年六月十九日に「従四位下行木工頭兼讃岐権守平朝臣正範を右近衛中将と為す。余官故の如し」(同前)と右近衛中将を兼任しており、赴任はしなかったと推測される。仁和五年(寛平元年)正月十六日には、藤原時平が権守となつている(『公卿』寛平二年)。但し時平は、権守就任以前に「同(仁和三)年二月十七日右権中将に任ず(元無官)。同三年八月廿六日藏人頭に補す」(同前)と右近衛権中将、藏人頭に任じられており、『職事』によれば寛平二年十一月二十九日に従三位に叙せられて藏人頭を去つている(『公卿』によれば、十一月二十六日に従三位)おり、また、寛平三年三月十九日には参議に任じられるが「兼国元の如し」であつた(『公卿』寛平三年)。当然、遙任である。

讃岐介 藤原高藤が、元慶八年三月九日に任じられているが(『三代』)、左近衛少将は元の如しとあつて、遙任であろう。仁和二年六月二十五日に「従五位上守左近衛少将兼行讃岐介藤原朝臣高藤」(同前)として見える。仁和三年六月二十五日にも「従五位上守左近衛少将兼行讃岐介藤原朝臣高藤」と見える。離任時期がはっきりしないが、源堪が、寛平元年正月十六日に讃岐介に任じられているので(『公卿』寛平五年)、それ以前には離れていたであろう。仁和五年(寛平元年)正月十六日に源湛が介に任じられているが(『公卿』寛平五年)、左近少将兼任で、これも遙任であろう。離任時期が明確ではないが、紀長谷雄が、寛平四年五月二十三日に讃岐介に任じられているので(『公卿』延喜二年)、

それ以前には離れていたであろう。道真在任中の介は、この高藤、堪の二名なのだが、いずれも遙任で、道真在任中介は在国していなかつたと見られる。

讃岐権介 高階忠岑が仁和二年二月二十一日に任じられているが(『三代』)、これ以後資料に見えない。在原友子が寛平二年正月二十八日に任じられているが(『公卿』昌泰三年)、恐らく道真の離任後であろう。讃岐掾 『菅家文章』に「藤十六司馬」(277、286)「藤司馬」(307)「藤六司馬」(317)と讃岐掾の藤原氏が見えるが、比定できない。あるいは後述する清貫の可能性もあるが、ここでは未詳としておく。

讃岐権掾 中原月雄が、仁和二年六月十九日「従五位下行助教中原朝臣月雄を讃岐権掾と為す。助教故の如し」(『三代』)と見え、助教を兼ねている。『政事要略』卷三十所引「阿衡任事」に仁和四年四月二十八日の日付で「助教兼讃岐権掾中原朝臣月雄」と見える。助教兼任なので、遙任であろう。藤原清貫が、仁和四年二月十日任讃岐権大掾(『公卿』延喜十年)。寛平五年五月十六日に中判事に任じられているので(同前)、そこで離れたか。権掾の中では清貫は赴任したか。ちなみに、讃岐掾は不明だが、道真の就任と同日、紀長谷雄が讃岐掾から離れ少外記に任じられている(『外記』仁和二年)。

讃岐目 『菅家文章』に「倉主簿」が見える(227、234)が、比定できない。

道真の讃岐での同僚は、多く遙任であることが確認できる。<sup>11)</sup>

○藏人頭 (寛平3・2・29任〜同5・2・16去)

〔同僚〕

藏人頭 源湛 (寛平2・9・20任〜同5・2・16去)

五位藏人 藤原高階 (寛平1・10任〜同3・4以前去?)

平季長 (寛平3・1・19任〜同3・4以前去?)

在原友于 (寛平3・4任〜同4・1・7去)

源希 (寛平3・4任〜同5・1・21去)

源昇 (寛平4・1・9任〜同5・1・21去)

藤原仲平 (寛平5・1・18任〜同6・1・7去)

藤原定国 (寛平5・1任〜同8・1去)

六位藏人 藤原玄上 (仁和4・12・15任〜寛平5・1・21去)

源実 (寛平3任〜同6・1・7去)

〔同僚〕

市川久編『藏人補任』<sup>12)</sup>によりつつ示す。

藏人頭 『職事』によれば、源湛は寛平二年九月二十日に藏人頭に補

され、同五年二月十六日、道真と同時に参議に任じられて頭を去っている。

五位藏人 藤原高階が寛平元年十月に五位藏人に補されている。また、

平季長が寛平三年正月十九日に五位藏人に補されている(『職事』)。両

名とも離任時期が明確ではないが、寛平三年四月七日には源希が既に

藏人(『公卿』寛平七年)<sup>13)</sup>、在原友于が同年四月に補されているので

(『職事』)、高階、季長ともに、これ以前に離任したと思われる。友

于は、寛平四年正月七日に、従四位下に叙されて五位藏人を去り(同前)、希は寛平五年正月二十一日に従四位下に叙されて去る(同前、

『公卿』寛平七年)。友于の後任として、源昇が寛平四年正月九日に補され(『職事』)、寛平五年正月二十一日に従四位下に叙されて去る

(『公卿』。『職事』では正月十八日)。すなわち、希・昇の両人が同時に去ったわけだが、その後任として、道真が転出する直前に、藤原仲

平、定国が補される。『職事』によれば、仲平は正月十八日補で、定国は正月補となる。<sup>14)</sup>

六位藏人 藤原玄上が仁和四年十二月十五日に補され、寛平五年正月二十一日、内宴で五位に叙されて去っている(『公卿』延喜十九年)。

源実が寛平三年に補され、同六年正月七日に五位に叙され去っている(『古今和歌集目錄』)。

○式部少輔(再任) (寛平3・3・9任〜同5・2・16)

〔同僚〕

式部卿 本康親王(元慶8・3・9任〜延喜1・12・14薨)

式部大輔 平惟範(寛平2・1・28任〜同5・3・15?)

式部少録 阿保扶(寛平3・2・21見)

〔考証〕

式部卿 本康親王が延喜元年十二月十四日に薨するまで式部卿(『紀略』)。本康は道真の讃岐守以前から式部卿である。

式部大輔 平惟範が寛平二年正月二十八日に任じられている。『公卿』

延喜二年に「寛平二正廿八式部大輔を兼ね。同五三十五肥後権守を兼ね。同六正七従四上。同九五廿五大藏卿」とあるが、道真が寛平五年二月十六日に大輔に転ずるので、それ以前に離任したと考えられる。式部少録 阿保扶が寛平三年二月二十一日に少録であったことが、『類聚符宣抄』（巻九・方略宣旨）に見える。

○左中弁（寛平3・4・11任↗同5・2・22転）

『弁官』<sup>15</sup>では、二月二十一日転任とする。後述する理由によって、ここでは、二十二日転任としておく。

〔同僚〕

左大弁 源直（寛平2・閏9・21任↗同4・2・21去）

藤原保則（寛平4・4・11任↗同5・2・22去）

〔考証〕

飯倉晴武編『弁官補任』<sup>16</sup>によりつつ示す。

左大弁 源直が寛平二年閏九月二十一日に就任（『公卿』寛平二年）。同四年二月二十一日に右衛門督に任じられたときに、弁を止められている（同前寛平四年）。『公卿』寛平四年によれば、藤原保則が「寛平三十四一左大弁」と、道真と同日に左大弁に任じられているが、それでは源直と重なることになってしまう。恐らく、寛平三年は四年の誤りで、保則は直の後任として左大弁に任じられたのであろう。<sup>17</sup>保則は、寛平五年二月二十一日に民部卿に任じられ、弁を止められた（『弁官』）。但し、『公卿』は二月二十二日とする。両者で日付が異なるが、これ

は道真も同じである。なお、『紀略』によれば、同年二月二十二日に除目が行われているので、ひとまずは『公卿』に従って、道真と保則は同日に転じたと理解しておく。

○諸社奉幣。松尾社への使となる（寛平4・8・14）

『寛平御記』同日条によれば、「松尾（使左中弁菅原朝臣）、鴨上下（式部大輔平惟範）、平野（源希）、稲荷（右中弁昇）、午刻太神宮に進発す（行方王）」とある。

○左京大夫（寛平4・12・5任↗同5・2・16）

同僚については未詳。

○参議（寛平5・2・16任↗同7・10・26）

〔同僚〕

左大臣 源融（貞観14・8・25任↗寛平7・8・25薨）

右大臣 藤原良世（寛平3・3・19任↗同8・7・16）

大納言 源能有（寛平3・3・19任↗同8・7・16）

中納言 源光（寛平3・3・19任↗同9・6・19）

藤原諸葛（寛平3・3・19任↗同7・1致仕）

藤原時平（寛平5・2・16任↗同9・6・19）

権中納言 藤原国経（寛平5・5・5任↗同9・6・19）

参議 源直（仁和2・6・13任↗昌泰2・12・26薨）

藤原有実（元慶6・2・3任）延喜14・5・12薨

藤原国経（元慶6・2・3任）寛平6・5・5）

藤原保則（寛平4・4・26任）同7・4・21卒）

源貞恒（寛平5・2・16任）延喜2・1・26）

藤原有穂（寛平5・2・16任）延喜2・1・26）

源湛（寛平5・2・16任）延喜8・1・12）

〔考証〕

『公卿』による。

○式部大輔（寛平5・2・16任）同8・8・28）

〔同僚〕

式部卿 本康親王（寛平3・9・9任）延喜1・12・14薨

式部少輔 紀長谷雄（寛平5・2・21任）同6・8・16）

〔考証〕

式部卿 本康親王は変わらず（任式部少輔条参照）。

式部少輔 紀長谷雄が「同（寛平）五年二十一式部少輔に任ず（兼官

元の如し）」（『公卿』延喜二年）と式部少輔に任じられている。寛平

六年八月十六日に右少弁に任じられているので（同前）、そこで離れ  
たか。

○左大弁（寛平5・2・22任）同9・5去）

『公卿』寛平五年では十二日転左大弁とするが、九条家本では

「廿二日」とあり、また、同じく『公卿』の任参議記事には、「二月十六日任。元藏人頭左中弁兼左京大夫式部少輔。左中弁元の如し」とあるので、それ以前の十二日に左大弁に任じられたとは考えられず、『政事要略』所引道真伝が「廿二日左大弁を兼ね」とするのを勘案して、寛平五年二月二十二日任左大弁と考える。離任時期だが、『公卿』寛平九年に「五月弁を去る歟」と注す。『弁官』には「五月弁を去る」とある。ちなみに、道真の任左大弁は、保則の後任である。保則は寛平五年二月二十二日に民部卿に任じられて弁を去っている（『公卿』）。

〔同僚〕

左中弁 源昇（寛平5・2・22任）同8・2・16去）

平季長（寛平8・2・16以後）同9・5・25）

源当時？（寛平9・5・25任）延喜5・3・25去）

左少弁 源当時（寛平7・8・16任）同8・1・26）

〔考証〕

左中弁 これ以前は、道真が左中弁であったのだが、道真の後任の左中弁には、右中弁であった源昇が二月二十二日に左中弁に任じられる（『公卿』寛平七年）。但し、『弁官』では、三月転になっている。いずれの可能性もあるが、道真の転任と同日と理解し、『公卿』に従う。

離任時期は、『弁官』寛平八年に「二月弁を止む」、『公卿』寛平八年に「二月十六日左中弁を止む」とあって、寛平八年二月十六日と考えて良からう。平季長が、『弁官』では寛平八年左中弁。『職事』によれ

ば、左中弁のまま寛平八年四月七日に藏人頭に補されているので、四月七日以前、昇が去った二月十六日以後に左中弁に任じられたのであろう。『藏人』によれば、寛平九年五月二十五日に右大弁に転じている。季長は寛平九年七月二十二日卒するが、「藏人頭従四位下守右大弁兼侍従山城守」であった（『紀略』）。『弁官』は七月二十三日卒とする。季長の後任として源当時は任じられるが（『弁官』）、恐らく道真が転じた後であろう。

左少弁 源当時は、『公卿』延喜十一年によれば、寛平七年八月十六日に任。寛平八年正月二十六日に権右中弁に転じている（同前）。

○勘解由長官（寛平5・3・15任〜同7・1・11）

同僚は未詳。

○春宮亮（寛平5・4・2任〜同7・11・13）

『公卿』寛平五年では四月一日任、『政事要略』所引道真伝では四月二日任となっている。なお、『御産部類記』（圖書寮叢刊）所引『本朝世紀』では、「同五年四月□日」と、日付が欠けている。皇太子は後の醍醐天皇だが、醍醐の立太子は「（寛平五年）四月二日庚午。詔して敦仁親王を皇太子と為す。即ち坊官等を任ず。太子年始めて九歳。或ひと云く、十四日壬午、冊立」（『紀略』）と四月二日である。後述するように、時平・定国も四月二日に任じられているから、道真も四月二日任であろう。なお、前掲『本

朝世紀』には、宇多の宣命とともに坊官の任命が記されている。上述のように日付は欠いているが、醍醐の立坊時期や『紀略』の記事から、四月二日と考えて良からう。以下、『本朝世紀』の日付は、四月二日であったとして考察を進める。また、『菅家文章』卷九・605「請特授従五位上大内記正六位上藤原朝臣菅根状」には「去寛平五年四月二日、東宮の始、太上天皇（宇多）臣に勅して曰く、…」とも見える。後、寛平七年十一月十三日に道真は春宮権大夫となるまでこの任にある。

〔同僚〕

皇太子傅 源能有（寛平5・4・2任〜同9・6・8薨）

春宮大夫 藤原時平（寛平5・4・2任〜同9・7・3）

春宮権亮 藤原敏行（寛平7・3任〜同7・11）

春宮大進 藤原敏行（寛平5・4・2任〜同7・3）

春宮権大進 藤原定国（寛平7・3・20任〜同9・7・3）

春宮少進 藤原定国（寛平5・4・2任〜同7・3・20）

春宮大属 壬生望材（寛平5・4・2任〜同9・4・8見）

春宮主馬首 良岑衆樹（寛平7・3・28任）

〔考証〕

皇太子傅 源能有が皇太子傅であるが、『公卿』寛平元年に「四月―皇太子傅を兼ね」と記す。しかし、この時は、まだ皇太子はいないので不審。『御産部類記』所引『本朝世紀』等を勘案して、寛平五年四月二日任と考えるべきであろう。能有は、寛平九年六月八日に薨する

まで皇太子傳である（『公卿』寛平九年）。

**春宮権亮** 藤原敏行が、寛平七年三月、春宮大進から転じ、同年十一月に春宮亮にさらに転じている（『古今和歌集目録』、『三十六人歌仙伝』）。

**春宮大夫** 藤原時平が寛平五年四月二日に任じられている（『公卿』寛平五年、前掲『本朝世紀』）。寛平九年七月三日に「春宮大夫（七月三日之れを止む。受禪に依りて也）」（同前寛平九年）とあって、醍醐の受禪によって、離れている。

**春宮大進** 藤原敏行が、寛平五年四月二日に任（前掲『本朝世紀』）。既述のごとく、寛平七年三月に春宮権亮に転じている。

**春宮権大進** 藤原定国が、寛平七年三月二十日に春宮少進から転じている（『公卿』昌泰二年）。醍醐受禪までこの任にあったと思しい（『春宮坊官補任』）。

**春宮少進** 藤原定国が、寛平五年四月二日に任春宮少進（前掲『本朝世紀』）。寛平七年三月二十日に春宮権大進に転じている（『公卿』昌泰二年）。

**春宮大属** 壬生望材が寛平五年四月二日に任じられている（前掲『本朝世紀』）。東山御文庫本『周易抄』紙背文書に、望材の名が数カ所に渡って見えるが、もつとも新しい寛平九年四月八日でも、春宮大属である。それ以後は、未詳。

**春宮主馬首** 良岑衆樹が寛平七年三月二十八日に任春宮主馬首（『公卿』延喜十七年）。恐らく醍醐受禪まで任にあったか。

○遣唐大使（寛平6・8・21任）同9・5・13見

寛平六年八月二十一日任。寛平九年五月十三日まで、大使として見える（『類聚三代格』卷八）。

（同僚）

**遣唐副使** 紀長谷雄（寛平6・8・21任）延喜2・10・28見

**遣唐判官** 藤原忠房（寛平御時）

**遣唐録事** 阿刀春正（昌泰1・10・5見）

**遣唐装束使** 源昇（寛平6・8任）同7以前？

〔考証〕

**遣唐副使** 紀長谷雄は道真と同日に任副使（『紀略』）。延喜二年十月二十八日まで副使として見える（『東南院文書』1—132）。

**遣唐判官** 『古今和歌集』（雑下・993）に「寛平御時、もろこしのはう官にめされて侍りける時に、東宮のさぶらひにて、をのことも酒たうべけるついでによみ侍りける」という詞書で、藤原忠房の歌が乗る。

なお、『古今和歌集目録』では、延喜十八年とするが、詞書からこの時とすべきか。

**遣唐録事** 阿刀春正が昌泰元年十月五日に見える（『東南院文書』1—72）

**遣唐装束使** 源昇が寛平六年八月に任じられている（『公卿』寛平七年）。寛平七年には離れていたようである（同前）。

## ○侍従（寛平6・12・15任↗同9・5・13見）

寛平六年十二月十五日任。寛平九年五月十三日まで侍従として見える（『類聚三代格』卷八）。恐らく、寛平九年六月十九日の任権大納言の時に離れたか。

〔同僚〕

源昇（寛平6・12・15任↗延喜8・1・12）

源希（寛平6・12・15任↗昌泰4見）

源貞恒（寛平9・1・11任↗昌泰1?）

在原友子（寛平8・1・26任↗同9・1・11）

藤原忠平（寛平8・1・26任↗延喜8?）

紀長谷雄?（寛平9・6・19任↗延喜2）

〔考証〕

寛平六年十二月十五日に源昇が任侍従（『公卿』寛平七年）。昇は、延喜八年正月十二日に任中納言。この時に侍従を離れたか（同前）。源希も昇と同日任侍従（『公卿』寛平七年）。昌泰四年までは侍従として見える（『公卿』）。源貞恒が寛平九年正月十一日に侍従（同前）。但し、昌泰元年には離れているようだ（同前）。在原友子が寛平八年正月二十六日任侍従（『公卿』昌泰三年）、同九年正月十一日に任右中将で「大夫元の如し」（同前）とあって、ここで離れたか。藤原忠平が寛平八年正月二十六日任（『公卿』昌泰三年）。延喜七年までは見える（『公卿』）。紀長谷雄が寛平九年六月十九日に任（『公卿』延喜二年）。あるいは、道真の後任か。延喜二年任参議とともに離れたようだ（同前）。

## ○近江守（寛平7・1・11任↗同8・1・26）

寛平七年正月十一日任。遙任である。翌寛平八年正月二十六日に藤原高藤が守に任じられている（『公卿』）。これ以前に離れたのである。なお、介、掾は未詳。

## ○中納言（寛平7・10・26任↗同9・6・19）

〔同僚〕

左大臣 藤原良世（寛平8・7・16任↗同8・12・25致仕）

右大臣 藤原良世（寛平3・3・19任↗同8・7・16）

源能有（寛平8・7・16任↗同8・6・8薨）

源能有（寛平3・3・19任↗同8・7・16）

大納言 藤原時平（寛平5・2・16任↗同9・6・19）

中納言 源光（寛平3・3・19任↗同9・6・19）

権中納言 藤原国経（寛平6・5・5任↗同9・6・19）

参議 藤原有実（元慶6・2・3任↗延喜14・5・12薨）

源直（仁和2・6・13任↗昌泰2・12・26薨）

源貞恒（寛平5・2・16任↗延喜2・1・26）

藤原有穂（寛平5・2・16任↗延喜2・1・26）

源湛（寛平5・2・16任↗延喜8・1・12）

藤原高藤（寛平7・10・26任↗同9・6・19）

源希（寛平7・10・26任↗昌泰2・2・14）

源昇（寛平7・10・26任↗延喜8・2・23）

八年)、これ以前に任を離れたか。

〔考証〕

『公卿』による。

○春宮権大夫(寛平7・11・13任)同9・7・3去)

〔同僚〕

皇太子傅 源能有(寛平5・4・2任)寛平9・6・8薨)

春宮大夫 藤原時平(寛平5・4・2任)同9・7・3)

春宮亮 藤原敏行(寛平7・11任)同9・7・3?)

春宮権大進 藤原定国(寛平7・3・20任)同9・7・3)

春宮大属 壬生望材(寛平5・4・2任)同9・4見)

春宮主馬首 良岑衆樹(寛平7・3・28見)

〔考証〕

春宮亮 藤原敏行が寛平七年十一月に任じられている(『古今和歌集目録』、『三十六人歌仙伝』)。恐らく、道真の後任であろう。受禪まで任にあったか。他の同僚については、任春宮亮条参照。

○民部卿(寛平8・8・28任)昌泰2・2・14)

〔同僚〕

民部少輔 藤原枝良(寛平7・8・16任)延喜4・2・26)

〔考証〕

民部少輔 藤原枝良が任じられている(『公卿』延喜十三年)。平時望が延喜四年二月二十六日に民部少輔に任じられているので(同前延長

○権大納言(寛平9・6・19任)昌泰2・2・14)

〔同僚〕

大納言 藤原時平(寛平9・6・19任)昌泰2・2・14)

権大納言 源光(寛平9・6・19任)昌泰2・2・14)

中納言 藤原高藤(寛平9・6・19任)昌泰2・2・14)

参議 藤原国経(寛平9・6・19任)延喜2・1・26)

藤原有実(元慶6・2・3任)延喜14・5・12薨)

源直(仁和2・6・13任)昌泰2・12・26薨)

源貞恒(寛平5・2・16任)延喜2・1・26)

藤原有穂(寛平5・2・16任)延喜2・1・26)

源湛(寛平5・2・16任)延喜8・1・12)

源昇(寛平7・10・26任)延喜8・2・23)

源希(寛平7・10・26任)昌泰2・2・14)

十世王(寛平9・6・19任)延喜16・7・2薨)

〔考証〕

『公卿』による。

○右大將(寛平9・6・19任)昌泰4・1・25)

〔同僚〕

右権中將 藤原敏行(寛平5・4・2見)同9・9)

源善（昌泰 1・10・20 見）同 4・1・25 解）

右少将 藤原定方（寛平 9・7・5 任）昌泰 4・1・26 転）

源嗣（昌泰 2・3・4 以前）同 2・4・2？）

良岑衆樹（昌泰 2・4・2 任）延喜 9・4・23 転）

右権少将 源嗣（昌泰 1・10・20 見）

〔考証〕

市川久編『近衛府補任』<sup>19)</sup>を参照しつつ述べる。

右中将 藤原仲平が寛平八年正月二十六日任右中将（『公卿』延喜八年）。同九年六月十九日に左中将に転じている（同前）。これならば、

同僚とはいえない。しかし、『古今和歌集目録』によれば、寛平八年

正月二十六日に権左中将で、同九年六月十九日に右中将に任じられている。そして、同年十一月服解、寛平十年正月復任となる。市川『近衛府補任』はこれに従い、延喜九年まで右中将とする。それならば道

真の同僚となるが、『職事』によれば、仲平は、延喜元年三月十九日に左中将で藏人頭に補されている。これ以前に左中将である。『公卿』

と『目録』では、寛平八年正月二十六日、同九年六月十九日という、任官の日付は同じであるから、やはりこれらの日に中将に任じられた

のは確かなのであろう。延喜元年三月十九日に既に左中将であることからすれば、『公卿』の方に蓋然性があるか。今は『公卿』に従い、

仲平は右大将道真の同僚ではなかったと考えておく。

右権中将 『古今和歌集目録』によれば、藤原敏行が寛平六年二月に任右近衛権中将だが、『御産部類記』所引『本朝世紀』によれば、寛

平五年四月二（？）日には既に右権中将であったようだ。寛平九年九

月の任右兵衛督（『古今和歌集目録』）の時に、中將から離れたか。源善が昌泰元年十月二十日に、右近衛権中將として見える（『扶桑略記』、

『競狩記』）。これ以前に任じられたのであろう。あるいは、敏行の後任であったとも推測される。道真左遷に伴い解任されている（『政事

要略』『扶桑略記』他）。

右少将 藤原定方が寛平九年七月五日に任右少将（『公卿』延喜九年）。

昌泰四年正月二十六日に左少将に転じている（同前）。良岑衆樹が昌泰二年四月二日任右少将（『公卿』延喜十七年）。延喜九年四月二十三

日に左少将に転じている（同前）。なお、源嗣については、次項にまとめて述べる。

右権少将 源嗣が昌泰元年十月二十日に右近衛権少将として見える

（『扶桑略記』、『競狩記』）。昌泰二年三月二十八日の、菅原道真（同（『辞右大臣』第三表）（『本朝文粹』卷五・120）に見える「今月四日、

中使従五位上守右近衛少将源朝臣緒嗣」は、源嗣か（市川『近衛府補任』）。『菅家文章』卷十・631では「左近衛少将」に作る。これが源嗣

なら、昌泰元年以後、正に転じたことになる。また、良岑衆樹が昌泰二年四月二日に右少将に任じられるので、嗣はその時に離れたか。<sup>20)</sup>

○中宮大夫（寛平 9・7・26 任）昌泰 2・2・14）

道真が大夫に任じられたこの日、藤原温子が皇太夫人となった（『紀略』）。それに伴う就任であろう。

〔同僚〕

中宮権大夫 藤原有穂 (昌泰1) 同2)

〔考証〕

中宮権大夫 藤原有穂は、これ以前寛平三年正月十一日に中宮大夫に任じられ、寛平九年まで中宮大夫として見えるが(『公卿』)、これは班子女王の時であろう。昌泰元年に中宮権大夫として見える(同前)。昌泰二年には中宮大夫となっている(同前)。これは、道真が右大臣となり(同年二月十四日)、大夫を離れたためであろう。

○右大臣 (昌泰2・2・14任) 同4・1・25)

〔同僚〕

左大臣 藤原時平 (昌泰2・2・14任) 延喜9・4・4(薨)

内大臣 藤原高藤 (昌泰3・1・28任) 同3・3・12(薨)

大納言 藤原高藤 (昌泰2・2・14任) 同3・1・28)

源光 (昌泰2・2・14任) 同4・1・25)

中納言 藤原国経 (寛平9・6・19任) 延喜2・1・26)

源希 (昌泰2・2・14任) 延喜2・1・19(薨)

藤原定国 (昌泰2・12・5任) 延喜2・1・26)

参議 藤原有実 (元慶6・2・3任) 延喜14・5・12(薨)

源直 (仁和2・6・13任) 昌泰2・12・26(薨)

源貞恒 (寛平5・2・16任) 延喜2・1・26)

十世王 (寛平9・6・19任) 延喜16・7・2(薨)

藤原有穂 (寛平5・2・16任) 延喜2・1・26)

源湛 (寛平5・2・16任) 延喜8・1・12)

源昇 (寛平7・10・26任) 延喜8・2・23)

藤原定国 (昌泰2・2・24任) 同2・12・25)

在原友子 (昌泰3・1・28任) 延喜10・4・20(卒)

藤原忠平 (昌泰3・1・28任) 同3・2・20(辞退)

藤原清経 (昌泰3・2・20任) 延喜15・5・23(薨)

〔考証〕

『公卿』による。

○大宰権帥 (昌泰4・1・25任) 延喜3・2・25(薨)

〔同僚〕

大宰大式 小野葛絃 (昌泰2見) 延喜1・7・10(見)

藤原興範 (延喜2・1・26任) 同7・2・29)

大宰少式 藤原菅根 (昌泰4・1・26任) 同4・2・29?)

大宰少監 小野葛根? (昌泰2任)

〔考証〕

大宰大式 小野葛絃が、昌泰二年に大式として見える(『大間成文抄』

卷四)。それ以後、道真が左遷された昌泰四年(延喜元年)七月十日にも「大式葛絃」として見える(『扶桑略記』)。延喜二年に藤原興範が大式に任じられるので、それ以前に任から離れたか。藤原興範が延喜二年正月二十六日に任大宰大式(『公卿』延喜十一年)。延喜七年二

月二十九日に右京大夫に任じられている（同前）。これ以前に大式からは離れたであろう。

**大宰少式** 藤原菅根は、『公卿』延喜八年によれば、「同四正廿六太宰大式に左貶。今日頭を止む。廿七日故の如く昇殿。二月十九日式部少輔」と、道真と関わる形で大式に左遷されるが、すぐに昇殿、二月十九日に式部少輔に任じられている。なお、『公卿』は大式とするが、前出のごとく既に大式としては葛絃がいる。ここでは『古今和歌集目錄』に従って少式とする。

**大宰少監** 小野葛根が任じられている（『大間成文抄』卷四）。いつまで少監であったかは未詳。

### おわりに

以上で考証を終える。不備・資料漏れ等、多々あることと思う。ご叱正をお願いしたい。同僚からでも、あるいは、『菅家文章』『菅家後集』に見える人物との関連からでも、論すべき課題は多いが、既に紙幅の余裕はない。今後の課題としたい。

### 注

- (1) 近年でいえば、高兵兵「菅原道真の交友と源能有」（和漢比較文学35・平成十七年八月）、同「菅原道真の「詩友」をめぐって——白居易との比較を中心に——」（語文84・85・平成十八年二月）がある。

(2) 吉川真司「律令官僚制の基本構造」（『律令官僚制の研究』塙書房・平成十年、平成元年初出）。

(3) 吉川「京都大学文学部博物館の古文書第4輯 勸修寺家本職掌部類」（思文閣出版・平成元年）。

(4) 古藤真平「登科記」八・九世紀文章生、文章得業生、秀才・進士試受験者一覧（稿）（『国書逸文研究』24・平成三年十月）。

(5) 中條順子「都良香伝考」（『今井源衛教授退官記念 文学論叢』九州大学文学部国語学国文学研究室・昭和五十七年）参照。

(6) 中野高行「尊経閣文庫本『外記補任』の補訂（Ⅲ）——八・九世紀分について——」（『史学』56—2・昭和六十一年九月）。

(7) 笠井純一「式部省補任稿——仁和三年以前——」（『金沢大学文学部論集』20・平成十二年三月）。

(8) 小野泰央「式部省関連資料（二）——（群馬高専レビュー）18・平成十一年——」。

(9) 宮崎康充編『国司補任 第二、第三』（統群書類従完成会・平成元年、平成二年）。

(10) なお、市川久編『藏人補任』（統群書類従完成会・平成元年）では、寛平五年まで讃岐介在任とするが、その事実を確認できない。

(11) 道真の讃岐時代の同僚については、竹中康彦「讃岐守菅原道真に関する一考察」（『大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』清文堂・平成十年）に指摘がある。

(12) 市川久編『藏人補任』（前掲）。

(13) 『公卿補任』では「四月七聴禁色衣服（藏人）」と記されており、これ以前に既に藏人であった可能性もある。但し、友子が四月補なので、恐らく希も四月補ではあろう。

(14) 市川「藏人補任」（前掲）では、『公卿』延喜八年に「同五正月十一兼讀







	藤原保則	藤原保隆	藤原淵名			藤原敏行	藤原当興	藤原冬緒	藤原定方				藤原定国	藤原貞則	藤原貞幹	藤原忠房		藤原忠平	藤原仲平	藤原清経	藤原清貫				
参議	左大弁	民部大輔	式部大丞	文章生	右中将	春宮亮	春宮権亮	春宮大進	式部大丞	民部卿	右少将	中納言	参議	春宮権大進	春宮権大進	春宮少進	五位藏人	民部大丞	式部大丞	遣唐判官	参議	侍従	五位藏人	参議	讚岐権大掾
参議	左中弁	民部少輔	式部少輔	文章生	右大将	春宮権大夫	春宮亮	春宮亮	式部少輔	民部少輔	右大将	右大臣	右大臣	春宮権大夫	春宮亮	春宮亮	藏人頭	民部少輔	式部少輔	遣唐大使	右大臣	侍従	藏人頭	右大臣	讚岐守
寛平5・2・16	寛平3・4・11	貞観16・2・29	貞観19・1・15	貞観4・5・17	寛平9・6・19	寛平7・11・3	寛平5・4・2	寛平5・4・2	貞観19・1・15	貞観16・2・29	寛平9・6・19	昌泰2・2・14	昌泰2・2・14	寛平7・11・3	寛平5・4・2	寛平5・4・2	寛平3・2・29	貞観16・2・29	貞観19・1・15	寛平6・8・21	昌泰2・2・14	寛平6・12・15	寛平3・2・29	昌泰2・2・14	仁和2・1・16
	221					174、386？			78、98							582、678				678					678、680

平正範		平季長	平惟範	文室長省	美奴清名		坂上茂樹	坂上斯文	八多常永	南淵年名	藤原連永			藤原良世			藤原有穂				藤原有実	藤原邦直	
讚岐権守	左中弁	五位藏人	式部大輔	式部大丞	存問渤海客	掌渤海客使	式部大丞	文章生	式部大丞	民部卿	式部少丞	左大臣	右大臣	右大臣	参議	参議	参議	参議	中宮大夫	参議	参議	参議	式部大丞
讚岐守	左大弁	藏人頭	式部少輔(再)	式部少輔	存問渤海客	治部大輔(仮)	式部少輔	文章生	式部少輔	民部少輔	式部少輔	中納言	中納言	参議	右大臣	権大納言	中納言	参議	中宮大夫	右大臣	権大納言	中納言	参議
仁和2・1・16	寛平5・2・22	寛平3・2・29	寛平3・3・9	貞観19・1・15	貞観14・1・6	元慶7・4・21	貞観19・1・15	貞観4・5・17	貞観19・1・15	貞観16・2・29	貞観19・1・15	寛平7・10・26	寛平7・10・26	寛平5・2・16	昌泰2・2・14	寛平9・6・19	寛平7・10・26	寛平5・2・16	寛平9・7・26	昌泰2・2・14	寛平9・6・19	寛平7・10・26	寛平5・2・16
174？、599、617	92？、141、153、		240、331、602、676	49？			555				78、483、554、621、648							599					656

		良岑衆樹	有名王	味酒文宗				本康親王	平定相
右少将	春宮主馬首	春宮主馬首	文章生	文章生	式部卿	式部卿	式部卿	兵部卿	式部大丞
右大将	春宮権大夫	春宮亮	文章生	文章生	式部大輔	式部少輔(再)	式部少輔	兵部少輔	式部少輔
寛平 9・6・19	寛平 7・11・3	寛平 5・4・2	貞観 4・5・17	貞観 4・5・17	寛平 5・2・16	寛平 3・3・9	貞観 19・1・15	貞観 16・1・15	貞観 19・1・15
		678						474、 496	

Michizane's colleagues

Koji Takikawa